

「飾り物」の手引きⅡ

「飾り物」を観賞する 評価する

高山市指定無形民俗文化財

高山の飾り物保存会

小瀬 信行

飾り物の手引き パートⅡ

1

ここでは飾り物の観賞、評価する場合の留意点について記します。

最初に下記の文章をご覧ください

「高山の飾り物の持つ **1** 香りと **2** 韻という言葉では表せない

3 渋みは、**4** 風流を通り越した一つの **5** 芸術だと思う。あるものを投げ出して、そこに物を描き出す。

これは昨日や今日の思いつきでなく、永い伝統の誇りと苦心、

6 端的に言えば **7** 芸の **8** 極致が十分にある」。

これは日本画家で文化勲章受章の前田青邨画伯が昭和二十三年四月日枝神社の大祭時の飾り物を見ての感想です。昔の言葉は難しいので先生の意を組んで電子辞書を引いて、上記の言葉青色の番号の文字を下記のように意識しますと

高山の「飾り物」の持つ **1** なんとなく感じられる良い感じと

2 趣のあるという言葉では表せない **3** 目立たないが落ち着いた

深い趣は、**4** 美しく飾ることを通り越した一つの **5** 観賞価値の高い所産だと思う。あるものを投げ出して、そこに物を描き出す。

これは昨日や今日の思いつきでなく、永い伝統の誇りと苦心、

6 率直に言えば **7** 技能を伴う遊びごとの **8** 最終的に到達するところとなる。となります。

飾り物の文献は、高山市史と福田夕咲さんの著書に

2

昭和五十三年の花森安治さんの「暮らしの手帳」のほか、なにか見当たらないかと大正以降の高山町や高山市の要覧など繰ってみました。

なかで昭和五年の飛騨総社式年大祭奉賛会の「飛騨の大まつり」の小冊子に、大祭では「飾物と称する独特の手芸としてその技を争う奉納物云々」とあり、献備品かもしれませんが記述がありました。

もう一点昭和五十六年の代情山彦氏の著書の中の”祭りと民俗”の項の「大まつり」に「数百年の伝統がある即興的な器物応用の飾物が考案されて、各町内に飾られ云々」とあり、現在の飾り物と思います。

最近では平成二十三年五月の桜山八幡宮の式年大祭に「参進行列」など十二点の飾り物が奉納された記録があります。

さて青邨画伯のいうような飾り物をどう仕立てるか、ではありますが

ご承知のように、飾り物には「テーマ」があります。

テーマは「干支」と「歌会始のお題」です。

テーマをどの道具を使って作品を仕立てるか、それが飾り物です。

飾り物を作るには、「発想第一」と福田夕咲さんは指摘しています。

考えた形を表すことを、飾り物では「見立て」と言います。

飾り物はテーマを同じ種類の道具三点以内で作品とすることです。

見立ての飾り物とは、言い換えれば

3

「道具の使い方の創意工夫」を競う仕立てごとなのです。

留意点 その1 「道具の種類と使い方」

道具の使い方の創意工夫を競うのが飾り物ですが、作品の評価、観賞には使っている「道具の種類と使い方」に特段の留意が必要です。

私は道具を「カタモノ」**固い道具**と「ヤワモノ」**柔らかい道具**とに分けて、作品に使っている道具を見ています。

「カタモノ」とは

普通に見る大工道具や茶道具や文房具、提げ物などの多くは、木や鉄、陶器やガラスなどで作られており「カタモノ」なので、立てたり横に寝かしたり裏返したりして見立てに使っていますが、道具の置き方や飾り方を工夫するだけで、曲げたり縮めたりできません。

「ヤワモノ」とは

一方、道具のなかで巻物や軸や書物などの紙製品、茶道具の袱紗や茶入れなど袋物などの布製品、ほか着物や帯や羽織の紐に帯締めなどの和装小物ほか太い紐などついた道具などは「ヤワモノ」で、広げたり縮めたり伸ばしたり丸めたり曲げたり巻いたり、いろいろな形に変化させて置いたり飾ったりできます。

「ヤワモノ」が道具として「カタモノ」より格がどうか 4

という意味ではなく、使い方に相違がでる、ということです。

「カタモノ」は「道具の形はそのままで置き方を工夫してテーマに見立てる」のに対し、

「ヤワモノ」は「道具の形を変化させてテーマに見合うように見立てる」ことができます。

「カタモノ」と「ヤワモノ」との道具の見立ての違いは、
道具の置き方で見立てるか、道具を変化させて見立てるかで、
作品づくりにとって重要な要素を内包していると指摘できます。

作品は「カタモノ」だけで仕立てたもの、「ヤワモノ」だけの作品、
「カタモノ」と「ヤワモノ」を混ぜて仕立てられている作品など、
いろいろあります。

「ヤワモノ」を使うと仕立てや飾り方の自由度が広がります。

「カタモノ」ではできない作品の微妙な表現も可能となり、同じテーマの作品でも見た目も印象も異なり、時に評価にも影響を与えます。

飾り物に精通している方が「ヤワモノ」を使った作品を見て、この作品のここの箇所は「作りもの」ではないか、と指摘されることがたまにありますが、すべて変化させて飾ってある箇所です。

作品の見方は人それぞれですが、作品を評価する場合、 5

「カタモノ」、「ヤワモノ」、「カタモノとヤワモノ」といつた

「道具の種類と使い方」に特段の留意が必要です。

「ヤワモノ」だけの優れた作品例として、市制三十周年に幅の違う角帯三本を巻いて年輪に見立てた作品が挙げられます。

帯という「ヤワモノ」を巻いただけで作品に見立てた優品です。

僭越ですが少し付け加えますと、わたくしの見るところでは、

「カタモノ」の作品をつくる作者は、「知恵」を働かして仕立てる傾向にあると観察しています。

「ヤワモノ」を使って作品をつくる作者は、「知識」を優先して仕立てる傾向にあるのではと思います。

どちらも優れた作品を仕立てられていますので、優劣はつけられませんので誤解のなきように。

留意点 その2 「飾り」ということ

もう一点留意していただきたいことは、「飾り物」の「飾り」という言葉です。

「飾り」とは、「松飾り」や「しめ縄飾り」、「門松飾り」など改まって飾ることです。

昔の式年大祭では、家々の表の格子を外し青竹の手摺りを 6

構え、小間に幔幕を張り、金や銀の屏風に緋毛氈などで設えて、飾り物を氏神様に奉納するために見合う飾りつけをしました。

今日の干支と歌会始のお題の飾り物は、お正月のお祝いのために飾るものなのですが、いまは作品を文化会館で展示していますので、お正月に皆さんの家庭のしかるべきところに飾るということが少ないようですが、この「飾り」という点に特に留意が必要です。

「オキモノ」ということ

さて、昨今の飾り物は、皆さんの見立ての技術が向上して、それなりのよい作品に仕立てられています。

しかし中には道具をただ漠然と置いただけの「オキモノ」も少なからず見受けられます。

お鏡飾りでいえば、三宝も裏白も橙もなく、お鏡だけをぽっと置いたような作品です。

お鏡と三宝、あるいはお鏡と橙だけでも、やはりお正月のお鏡飾りとしては物足りません。

作品への発想も道具も吟味されているのに、これが飾り物ですと言わんばかりに、道具だけただ漠然と置いただけの「オキモノ」では

作品への注目も集められませんし、作品としても評価を得る 7

ことには結びつかないのではと経験的に思います。

展示会の度「カタモノ」の作品「ヤワモノ」の作品が出品されます。

その中でテーマに沿った飾りつけで道具の質も配置も無理なく表現された眼を引く見立ての作品が、毎回数点見受けられます。

そのような作品は、道具の質感・道具の寸法・道具の配置が自然体で奇を衒わず、作品自体が「飾り」そのものとなっているのです。

飾り物の作品を仕立てる場合、または観賞する場合、あるいは評価する場合には、「飾り」という点も十分考慮に入れて作品に接することが非常に大切ですので留意してください。

以上二点、飾り物に関する重要な留意点について述べました。

さて、「飾り物」とは

前田青邨画伯が高山の飾り物は「あるものを投げ出して、そこに物を描き出す」と言うのは、同じ種類の道具三点以内で仕立てた見立ての飾り物のことです。

また前田さんは、飾り物は昨日や今日の思いつきでなく伝統の誇りと苦心、そして「技能を伴う遊びごとの極致」と言っています。

福田夕咲さんも飾り物を「すさび」すなわち「遊び」と言います。

もうお分かりのように「飾り物」とは、テーマに沿った作品を 8
身近な道具を使って仕立てる「**技能的な遊び**」のことなのです。

この章のまとめとして

先に「カタモノ」の作品をつくる作者は「**知恵**」を働かして仕立て
る傾向にあり、「ヤワモノ」を使った作品をつくる作者は「**知識**」を
優先して仕立てる傾向にあるのではと言いました。

「**知恵**」を働かせる人も、「**知識**」を優先する人も、以上述べまし
た「**道具の種類と使い方**」に「**飾り**」という点にも十分留意して作品
を仕立てたり、観賞したり、評価したりすれば、その人は「**技能**」も
兼ね備えた「**飾り物**」巧者になること間違いなし、と思います。

飛騨高山の「**飾り物**」の観賞、評価の参考になればと思います。

以上です。

終わりに

毎年お正月に開催される飾り物は、大原正純郡代以降二百三十余
年の歴史があり、**知恵**と**知識**と**技能**が一体となった遊びであります。

高山市指定無形民俗文化財の高山独自の「**飾り物**」を切磋琢磨して、
多くの市民の皆さんとともに、次の世代へ継承しましょう。

令和四年睦月吉日 文責 小瀬信行